内蒙古自治区通遼市扎魯特旗所在の遼代誉州故城について

高橋学而*　　中尾幸一**

Surveys of “Yu zhou”town sites at Zhelute banner in Inner Mongolia

Gakuji TAKAHASHI*　　Kouichi NAKAO**

ABSTRACT

Walled town “Yu zhou”（豫，誉州） in Liao dynasty is the first town where the location was revealed in several Tou xia zhou（頭下州）where it exists in a pasture. This study has added an analysis of a satellite imaging data to result based on an actual investigation. It’s being also analyzed about the near various remains including a grave as well as “Yu zhou” sites. The epitaph which could specify the location of “Yu zhou” above all, the unearthed grave is important.

Keywords : Tou xia zhou（頭下州）, pasture , satellite, investigation

1. はじめに

近年，筆者の一人高橋は，内蒙古（内モンゴル）自治区をたびたび訪れ，所在する多くの遼代の遺跡を踏査する機会に恵まれた．今回報告する遺跡は，自治区の通遼市に所在するが，その通遼市は，中華人民共和国とモンゴル国が接する地に弓型に張り出して設けられている内蒙古自治区のほぼ中央，その弓型の屈曲部に位置している．市全体の人口は約310万人であるが，そのうちモンゴル族の人口は138万人を数え，中国全体のモンゴル族のおおよそ4分の1を占めている．現在，通遼市は，自治区の中心である呼和浩特市を超えて，中国国内で最多のモンゴル族人口を擁する都市となっている．本稿で取り上げる，現地名ウェンドゥルハダ古城は，通遼市の西北部に位置する扎魯特(ジャルート)旗のやや北寄りに所在する．城址は，1995 年，近郊から出土した墓誌の記載から遼代の誉（豫）州城址に比定されるに至った．城址について，以前，筆者は簡略な踏査報告中に触れたことがあるが[1]，一般に同古城を誉州ともいい，豫州とも記すのは，墓誌と『遼史』地理志のそれぞれの表記の相違に拠っている．本稿では，墓誌に従い，行論の上で統一的に誉州を用いる．以下，2012年次の踏査成果に，ALOSのprismの解析を加え，同州城について整理を進める．

*　博多女子中学校・高校　教諭
**　都市工学科　名誉教授

図1　誉州故城の位置

2. 比定の経緯

誉州について，『遼史』地理志は，頭下州の条に豫州として「横帳陳王牧地，南至上京三百里，戸五百．」と記すだけであって，その情報は非常に限定されている．位置についても，この記載からでは上京（現在の赤峰市巴林左旗林東鎮の南に位置する上京故城）の北 300 里に所在することが知られるのみである[2]．従って，誉州の地理的位置について専考する論考は皆無であり，また，誉州

に言及したものを数えても決して多くはない．中国東北地方に於ける歴史地理研究の上で記念碑的著作である『満洲歴史地理』も[3]，或いは，20 世紀後半に出版された『東北歴代疆域史』も[4]ともに扎魯特旗の西境と推定するだけであった．一方，1950 年代後半から，60 年間の長きにわたり東北地方の遼代の城郭址について精力的に調査を進めて来た馮永謙氏は，先ず『遼史』や『契丹国志』，更には『亡遼録』に示された頭下州城の異同に着目し，建城の経緯について分類を行い[5]，また，『遼志』地理志に記された 16 頭下州城の位置について考察を進め，誉州についても，その論考中に扎魯特旗の西部にある格日朝魯郷に所在する格日朝魯古城に比定を試みた[6]．その後，1995 年，扎魯特旗の公安局によって，旗の中心である魯北の北方，哲北農場で墓誌が一点回収されることがあった．灰色の砂岩製，無蓋，方形，一辺 67cm，厚さ 15 cmを測る，その墓誌は盗掘された遼代の墓葬から出土したものであった．誌面には，楷書で「故聖宗皇帝淑儀贈寂善大師墓誌銘幷引」以下，887 字が陰刻されている．その記載内容から，墓主が遼朝全盛期の聖宗の妃であった耿淑儀贈寂善大師であることが判明した[7]．耿淑儀は，統和元年（983 年）に生まれ，清寧 9 年（1063 年）に没したことが墓誌の記載からは知られるが，注目されるのは埋葬地点について「礼葬于誉州東，赤崖之北」と記していることである．耿淑儀墓の位置は明瞭であって，その結果，埋葬地点から山を挟んだ西隣に位置するウェンドルハダ古城が誉州に比定されるに至ったのである．この寂善大師墓の発見の後，ようやく誉州故城の紹介がなされるようになってきている[8]．

さて，城址は，内蒙古自治区通遼市の北部に位置する扎魯特（ジャルート）旗の巴雅爾吐胡碩蘇木（パヤルトゥフシュォスム）に所在する．ジャルートは，モンゴルの族名であり，スムとは村落を指すが，巴雅爾吐（パヤルトゥ）は，モンゴル語で「喜び」，胡碩（フシュォ）とは「山の端」という意味で，喜びの山の端という意味になる．ただ，1949 年以前は，6 軒の家屋という意味のジルガンゲールと称されていた．しかし，その後，ナーダムがこの地で開催されたことからパヤルトゥと改称され，その後，2006 年，東隣の烏蘭哈達蘇木(ウランハダスム)と合併，現在の巴雅爾吐胡碩蘇木へ編制されることとなった．古城は，そのパヤルトゥフシュォの南に所在する，ウェンドゥルハダ（温都爾哈達）の地に位置している．ウェンドゥルハダとは「高い岩山」という意味を持つが，古城は，誉（豫）州城址と称される他，温都爾哈達古城と表記されることがある．古城は，1975 年に発見され，1989 年にもとの哲里木盟の重点文物保護単位に認定され，更に 2013 年には全国重点文物保護単位に昇格することとなった[9]．

3．城址の概要

3.1　平面図の作成　　陸地域観測技術衛星だいち(ALOS)搭載のセンサの prism の画像を用いて誉州城の現況を表す平面図を作成した．図 2 が誉州城付近の衛星画像である．2010 年 2 月 15 日観測データで，リモートセンシング技術センターより提供されたものである．

図2　誉州故城付近の prism の画像

画像上で城址の平面図を作成する方法を以下に述べる．

(1)画像は 1 シーン縦 14000，横 29432 点(ピクセル)で構成され，35km×73.580kmの領域をカバーしている．この画像上，左上隅を原点とした平面直角座標で城址を表す骨組を構成する点の位置を測定する．測定される座標は原点からのピクセル数で，1ピクセルの間隔は 2.5mであるので，そのピクセル数に 2.5mを乗じた値が座標値となる．

(2)骨組み上の適当な2点について，Google earth 上で緯度，経度またはUTM座標を求める

(3)(2)で求めたUTM座標と，画像上で求めた座標を標定点として骨組みの座標をUTM座標に変換する．

(4) 骨組みの点を基準として prism の画像上の城址を表す点の位置を測定して図を作成する．

測定した図を画像に上描きしたものが図3である．図4は測定値を用いて作成した誉州城址の図である．

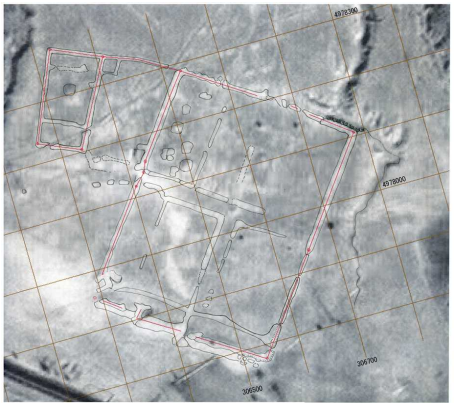

図3　prism の画像に城址の図を重ね描きした図

3.2　誉州城の規模　　図5は誉州城の城壁を表す骨組み図である．主部は 309m×411mで，西に主部の約4分の1の区画をそなえている．主部は壁によって区割されていたことがよみとれる．

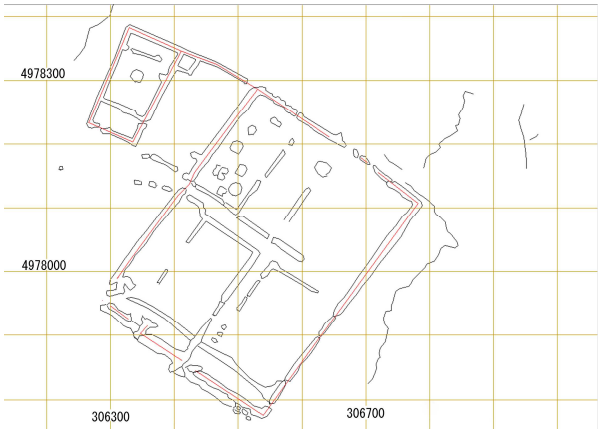

図4　誉州故城の平面図

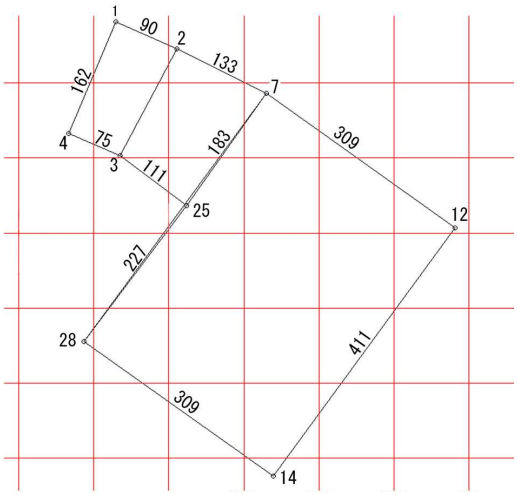

図5　誉州故城骨組み図

3.3　鳥瞰図の作成　　平面図に高さを加えると鳥瞰図を描くことができる．誉州故城の区域内は約30m以内の高低差であるので，同一平面として概略の鳥瞰図をえがいた．図6は南方1km，高さ1kmから見た鳥瞰図である．

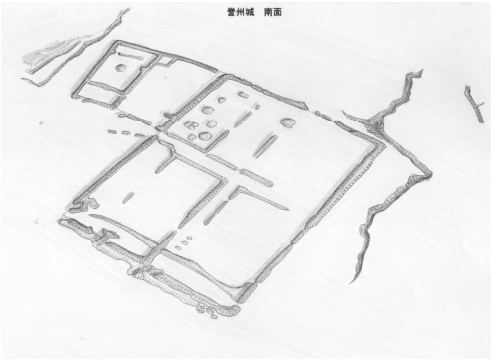

図6　誉州故城の鳥瞰図

4．城郭の構造，機能した時期

誉州故城について，以前，閆洪森氏は踏査を試み，外周1460m，南，北，西，東北隅に各一門を開き，城壁の現高 0,5～1m前後，現在の基底部の幅を 22～25mと報告している[10]．また，城内には我々の踏査時も建築基壇と推定されるいくつかの方形状の土地の隆起が認められた．更に閆氏等の報告によれば，古城の西北隅や東北隅の外方には建築址が確認されるとのことであるが，画像からは，西北隅外方の囲郭のみが確認される．図4に明らかなように故城は，南北中軸線がおおよそ西に30度振れている．

図7　東壁（北→南）

今回の平面図作成において，その規模を前節で主部309m×411mと記した．詳細には図5に示すように北壁309m，東壁411m，南壁309m，西壁410m，外周1439mとなる．閆氏の踏査報告に基づく数値とは約 1.5%の相違があるが，実測に基づく測量図が報告されていない状況では双方の測定値にこのレベルでの相違が生ずることは許容せざるを得ないと考える．

また，城門の確認は容易ではないが，南壁，北壁それに西壁のそれぞれほぼ中央に城壁の断裂が見られる．更にその断裂部付近には，いずれも城壁外方に一部突出部が見られる．城壁上を踏査している際には気付かなかったが，或いは甕城の痕跡として理解すべきものなのかも知れない．城内の街路については城内中央に十字街，或いはT字街の存在を推定することが可能である．

西北隅に接する西方の囲郭については，北壁 223m，東壁183m，南壁186m，西壁162mを測る．この囲郭については踏査しておらず，その性格については今後の調査に拠らなければならない．ただ，囲郭内左方の，その中央やや北寄りに円形の土地の隆起が見られることは注意すべきであると考える．南北に二重に囲郭された中央に位置する，その円形の隆起は，前出の閆氏等によれば現高約2,5m，直径約 15mと報告され，この隆起上には大量の塼片，陶磁器片，彩釉陶器片が発見されているとのことである．塼塔址の可能性も含め，この故城西面の囲郭が寺廟

址である可能性も考慮しておきたい．

次に故城が機能した時期であるが，既に記しているように比定の拠りどころになった寂善墓誌に従うと，清寧 9 年（1063 年）の時点で既に機能していたことは明らかである．ただ，現在まで発掘が行われているわけではなく，その建城の時期を特定することはできない．城内では遺物が散見し，それら獣面瓦当，鴟尾，手紋塼など遺物の一部は，扎魯特旗博物館に収蔵され[11]，また，我々の踏査時にも，図8に示すように，遼代の遺跡中でしばしば出土する灰陶の筒瓦片が容易に発見された．しかし，これら城内から出土した遺物は遼代当時の特徴を有する理解されてはいるものの，城壁の調査がなされていない現在，時期を特定するには至らない．第2節で示したように，『遼史』地理志は，頭下州の条に横帳陳王の牧地と記している．前述した聖宗の妃寂善の逝去以前では，韓制心が知られる[12] が，現在，遼代に数人知られる陳王の検討はなされねばならない．

図8　城内で確認された筒瓦

5. 近郊の諸遺跡

古城の近郊には，冒頭で述べているように古城比定の根拠となった寂善大師墓が，哲北農場，別に烏日根塔拉（ウリゲンタラ）農場とも言われるが，その一分場である東北山で発見されている．ウリゲンタラとは，モンゴル語で「広々とした草原」を意味するが，大師墓所在地一帯は，大師墓のみならず，およそ2kmの範囲内で大小 200 基以上の墓葬が存在すると報告されている．大師墓そのものは盗掘に遭い，正式な報告はないが，八角形の塼室墓で，甬道左右に耳室を有することが確認されている[13]．また，1996 年の 7 月から 9 月に行われた緊急調査では，3 号墓に整理される寂善墓の南で 4 号墓が確認され，契丹小字墓誌が出土している[14]．墓主は，報告者である楊杰氏によれば，聖宗と寂善の子である耶律宗愿の子耶律弘用とその妻蕭氏である[15]．また，その耶律宗愿については，その墓誌が扎魯特旗東隣の科爾沁右翼中旗の公安局によって，盗掘者の手から 2000 年 5 月に回収されている[16]．宗愿墓誌の釈読を進めた盖之庸氏は，出土地不明と述べるが[17]，ウリゲンタラより出土したとの伝聞情報も一部残されており[18]，また，何に拠ったか不明だが，耶律宗愿墓がその母寂善と同じ墓域に所在していたことを直截的に記す記述も確認される[19]．更に，国道 304 号線沿いでは，20 数基の遼墓群が発見されており，304 号線の整備に伴う過程で多くが破壊されてしまっている．そこで，扎魯特旗文物管理所の支援の下，内蒙古考古研究所，通遼市博物館が緊急発掘を進めたのだが，その報告によれば，誉州の南 15 ㎞に所在するこれらの墓群は，発掘された 4 基の墓葬から中級の貴族墓である可能性が指摘されている[20]．その他，これら墓葬群から出土した鎏金銀面具，鎏金鳳冠，銀製の刀子などの遺物について報告がなされているが，その報文には，いずれも盗掘によることが記されている[21]．これらから，1995 年の寂善墓の盗掘前後から，少なくとも数年間，当該地域一帯で盗掘が盛んに行われていたことが推測される．その他，誉州故城の東方 40km，扎魯特旗の中心である魯北からは東北 45kmの嘎亥図鎮の金門山では，山内に 3 カ所の遼代の墓葬と，それらの墓葬の更に外方の広い地域にはやはり遼墓が分散して発見されている[22]．

また，墓葬以外には，巴雅爾吐胡碩蘇木の四家子嘎査で，青色塼，布紋瓦，灰色陶器片を出土する遼代の古城が一カ所発見されている．現地の農民は金羅城と称しているとのことであるが，詳細は知りえない[23]．更に，同じ巴雅爾吐胡碩蘇木の梨樹溝で遼代の寺院址が発見され，1987 年に扎魯特旗の，次いで 1996 年には哲里木盟の重点文物保護単位に認定されたが[24]，金羅城，梨樹溝の寺院址のいずれも報告は発表されていない．

6. 終わりに

今回，本小稿で報告を行った誉州故城は，牧地に設けられた頭下州城の位置が特定された貴重な事例である．『遼史』地理志が掲げる16カ所の頭下州のうち，牧地に築く事例は以下の諸城である[25]．

表1　牧地に造営された州城

州　名	建城に関する記載	戸数	位置情報
誉(豫) 州	横帳陳王牧地	500	上京の北 300 里
遂　州	南王府五帳放牧于此	500	上京の東南 1000 里 檀州の西 200 里
豊　州	遥輦氏僧隠牧地	500	上京の南 350 里
閭　州	羅古王牧地	1000	上京の東南 950 里 遼州の西 130 里
松山 州	横帳普古王牧地	500	上京の南 170 里
寧　州	横帳管寧王放牧地	300	上京の東北 350 里 豫州の東 80 里

これらの諸州城について，前述の馮氏は，既に紹介した論考中で豊州城址を翁牛特旗烏丹鎮東北の遼代の遺跡

に当てる以外，いずれも古城址の比定を試みている[26]．これらの州城は表1に示したように地理情報に乏しく，考察も大きく進捗しておらず，また，馮氏の論考発表後に発見された寂善大師墓によって誉州の位置が確定した現在，寧州についてもその位置の再検討はなされねばならないが，誉州，寧州を除く他の諸州城が当てられる諸古城，遺跡を整理すると以下の通りとなる．

表2　牧地に建城された州城比定地

州　名	比定される古城等	概況：外周，構成要素等	註
遂　州	遼寧省彰武県四合城郷土城子村古城	一部損壊，東西現 420m，南北現 210m	①
閭　州	遼寧省阜新県十家子郷焼鍋屯古城	外周 1300m，布紋板瓦，陶磁器片が散布	②
松山州	内蒙古巴林右旗白音査干郷布敦花村古城	外周 2210m，内外重城．甕城	③
豊　州	内蒙古翁牛特旗烏丹東北の遼代遺跡	瓦片，陶磁器片の散布が見られる．	④

［註］

①張春宇，劉俊玉，孫杰『彰武県文物志』（遼寧民族出版社，1996 年）全 415 頁，孫杰，高慶昇「阜新地区遼城考記」（『阜新師専学報』1992－2）23～29 頁

②李宇峰「阜新地区的遼代古城址」（『遼金契丹女真史研究』1987－1）29～32 頁，孫杰，高慶昇「阜新地区遼城考記」（『阜新師専学報』1992－2）23～29 頁

③韓仁信『遼代城址探源（巴林右旗文史資料第六輯）』（遠方出版社，2003 年）全 139 頁

④馮永謙「遼志十六頭下州地理考」（『遼海文物学刊』1988－1）79～98 頁

表2に掲げるように，これらの州城のうち，豊，松山2州は内蒙古自治区に所在し，遂，閭2州は遼寧省西部の蒙古族自治県である阜新県とその隣接する彰武県に位置している．誉州古城址の所在する科爾沁地区とも一部重なる西遼河の流域では，遼代 200 年間にあっても，或いは，現在と比較しても植生が異なるとの理解も呈されており[27]，現在の自然景観から城郭造営時のそれとを直ちに結びつけることはできない．しかし，現在，これらの州城比定地が人口の稠密な地域でないことについては共通している．従来，遼代の州県城が，その外周によって階梯的に分類出来ることは早くから指摘されてきた[28]．近年では特に内蒙古自治区東南部の遼代の城郭を総観した畢顕忠氏は，多くの県城の外周が 1500m前後に集中していること[29]，また，王暁琨氏は県城が1500mを越えることは数例見られるものの，大多数は 1500m以下であることを述べている[30]．諸説様々な理解がなされるが，外周 1500mを下回る方形城郭が，基本的に県城に相当することについては諸説におおよそ異論がない．表1に示すように，地理志に従うと閭州のみが 1000 戸の住民を抱えてはいるが，他の諸城は同じく 300～500 戸と極めて少ない．これは城郭周囲の可耕地が限定されていた可能性が一因として推測される．『遼史』に記された戸数が建城時のものであるかどうかは今後の調査に待たねばならないが，牧地に建設された州城が，立地の異なる他の地域の州城に比較し狭少であることは十分に考えられる．

その他，州名比定の根拠となった寂善墓誌中の記載に「赤崖の北」との記載が見られるのは既に記している通りである．扎魯特旗のモンゴル語地名については，近年，その地域的特徴に着目した論考が発表され，同地のモンゴル語の地名が，16世紀半ば，明の嘉靖年間以降という比較的新しい時期のものとする指摘がなされている[31]．しかし，現在の巴雅爾吐胡碩蘇木の中心である巴雅爾吐胡碩鎮の西に誉州故城が所在すること，現在の巴雅爾吐胡碩蘇木の東部がもとの烏蘭哈達蘇木であり，その烏蘭哈達(ウランハダ)がモンゴル語では，赤い岩山であることを考えれば，勿論，後代，変わらぬ自然景観の特徴に従って命名された地名が，結果的に前代のものと一致する場合も考えられるが，また同時に，墓誌に記された地名が現在にまで延続する可能性も指摘される．

最後に，ここに付記したいのは，目下，やはり位置が不明瞭である寧州についてである．『遼史』地理志は，寧州について，「本大賀氏勒得山，横帳管寧王放牧地．在豫州東八十里，西南至上京三百五十里．戸三百．」と記している[32]．この記載に従うならば，寧州は誉州の東 80 里に位置する．そこで，誉州故城の東方一帯，直線にして八十里，おおよそ 40～45 ㎞を最遠とする範囲を地図上で確認すると[33]，現在の扎魯特旗嘎亥図鎮の北部一帯，塔拉宝力皋蘇木南部一帯となる．従って，寧州は，その西方に候補地を求めることができると考える．前節に紹介した遼代の墓葬が複数確認される金門山は，おおよそその条件とは齟齬しない．筆者は，衛星画像中に目下，明瞭な囲郭を見出さないが，金門山周囲一帯に寧州故城の候補地が求められるのではないかと考えている．

以上，2012 年度の踏査結果に基づき，遼代誉州故城，ウェンドルハダ古城について報告を進めて来た．踏査に費やせた僅かな時間では，城門を始め，城郭の構成要素について新たに報告することはできないが，城郭の四周と城外の遺跡の現況について報告を試みた．また，併せて，目下，扎魯特旗政府が，古城一帯の地域を観光基地化し旅游客の誘致に努めていることもあり[34]，同古城が，形を変えた観光資源として整備される以前の状況をここに示しておきたいと考える．

付記

本論考は，高橋学而「遊牧民社会に於ける都市の出現と社会変容についての考古学的追究―契丹を事例に」（『日本学術振興会平成 29 年度（2017 年度）科学研究費補助金：奨励研究）による成果の一部である．

謝辞

リモートセンシング技術センター提供の prism 画像は平成 24 年度神戸高専共同研究費（研究助成）「内蒙古東部および遼寧省における 10-16 世紀の都城遺跡と窯業遺跡の総合的研究」（町田吉隆，中尾幸一）により購入したデータを利用した．記して謝意を表する．

参考文献及び註

(1) 高橋学而「2012 年度内蒙古自治区東部遼金代遺跡踏査記－興安盟を中心に－」(『遼金西夏史研究会ニューズレター』第 6 号，2014 年) 26～37 頁
(2)『遼史』巻三十七・志第七・地理志一・上京道
(3) 松井等「満洲に於ける遼の疆域」(『満洲歴史地理』第二巻，南満洲鉄道株式会社，1911 年) 1～108 頁
(4) 張博泉，蘇金源，董玉瑛『東北歴代疆域史』(吉林人民出版社，1981 年) 全 324 頁
(5) 馮永謙「遼代頭下州探索」(『北方文物』1986－4)80～85 頁
(6) 馮永謙「遼志十六頭下州地理考」(『遼海文物学刊』1988－1)79～98 頁
(7) 郝維彬「遼《故聖宗皇帝淑儀贈寂善大師墓誌銘》考，釈」(『哲里木盟博物館館刊』第 4 号，1996 年) 69～74 頁 郝維彬「遼《故聖宗皇帝淑儀贈寂善大師墓誌銘》考釈」(『内蒙古文物考古文集』，中国大百科全書，1997 年) 537～543 頁，郝維彬「遼《故聖宗皇帝淑儀贈寂善大師墓誌銘》考釈」(『考古学集刊』第 14 集，2004 年) 433～440 頁
(8) 閆洪森「扎魯特旗豫州城遺址」(『通遼文化遺産』，文物出版社，2014 年) 144～147 頁，等
(9) 郭洪申，劉浩淼「扎魯特旗2処文物遺址晋升為“国字号”」(『内蒙古日報』2013 年 5 月 30 日)
(10) 註 (8) 及び張立軍，徐長春『神奇科爾沁』(内蒙古人民出版社，2006 年) 全 224 頁
(11) 註 (1) に同じ．
(12)『遼史』巻八十二・列伝第十二・耶律隆運，等
(13) 閆洪森「扎魯特旗寂善大師墓」(『通遼文化遺産』，文物出版社，2014 年) 188～189 頁，等
(14) 陳乃雄，楊杰「烏日根塔拉遼墓出土的契丹墓誌銘考釈」(『西北民族研究』1992－2) 72～90 頁
(15) 楊杰「烏日根塔拉遼墓出土的契丹墓誌銘考再考」(『西北民族研究』2003－4) 68～70 頁
(16) 趙彦昌，王紅娟「遼代石刻档案研究」(『遼金歴史与考古』第 2 輯，2010 年) 343～372 頁
(17) 盖之庸「遼耶律宗愿墓誌考釈」(『中国歴史文物』2002－3) 49～57 頁，王昕「遼耶律宗愿墓誌釈文商権」(『中国歴史文物』2004－5) 77～81 頁
(18) 註 (1) に同じ．
(19) 郝維彬「《科爾沁歴史珍宝展》展覧大綱」(『科爾沁博物館館刊』2005－1) 17～23 頁
(20) 賁鶴齢，王崇存，哈日乎「内蒙古扎魯特旗哲北遼代墓葬群」(『北方文物』2002－4) 30～31 頁，色音，姜為民，賁鶴齢「内蒙古扎魯特旗哲北遼代墓葬群」(『科爾沁博物館館刊』2005－1) 14～15 頁
(21) 武雄琴，李鉄軍「扎魯特旗出土遼代器物」(『内蒙古文物考古』2001—2) 96～97 頁
(22) 註 (10)，等
(23) 註(1)．2012 年度訪問時の扎魯特旗博物館展示のパネル資料による．
(24) 通遼市文化局「通遼市各級重点文物保護単位名単」(『科爾沁博物館館刊』2005－1) 1～2 頁
(25) 註 (2) に同じ．
(26) 註 (6) に同じ．
(27) 郭紹礼「西遼河流域沙漠化土地的形成和演変」(『資源科学』1980－4) 46～52 頁，王守春「10 世紀末西遼河流域沙漠化的突進及其原因」(『中国沙漠』2000－3) 238～242 頁，韓茂莉「遼代西遼河流域気候変化及其環境特徴」(『地理科学』2004－5) 550～556 頁，等．
(28) 吉林省考古研究室，吉林省文物考古工作隊「統一的多民族国家的歴史見証—吉林省文物考古工作三十年的主要収獲」(『文物考古工作三十年』，1981 年) 100～112 頁，李逸友「遼代城郭営建制度初探」(『遼金史論集』第三輯，書目文献出版社，1987 年) 45～94 頁，高橋学而「中国東北地方に於ける遼代州県城—その平面構造，規模を中心として—」(『東アジアの考古と歴史』：岡崎敬先生退官記念論集上巻，同朋社，1987 年) 279～324 頁
(29) 畢顕忠「内蒙古東南部遼代城址分類挙例」(『東北史地』2009－2) 76～81頁
(30) 王暁琨「内蒙古東南部遼代城址的分佈及類型研究」(徐光輝編『東北アジア古代文化論叢』，北九州中国書店，2008年) 299～323頁，王暁琨「内蒙古東南部遼代城址的分類及研究初識」(『北方民族考古』第一輯，2014年) 287~314頁
(31) 斯琴朝克図，烏蘭図雅「内蒙古農牧交錯地帯地名特徴浅析—以扎魯特旗為例」(『内蒙古林業科技』2011－1) 40～44 頁
(32) 註 (2) に同じ．
(33) 遼代の1里の長さについては諸説見解の統一をみておらず，おおよそ 500～560mの範囲で様々な理解が呈されている．近年の論考としては，于学双「遼里長度析」(『松州学刊』2010－6) 49～51 頁が挙げられる．
(34) 扎魯特旗旅游局局長白乙拉「讓特色旅游成為通遼市独具魅力的朝陽産業」(『通遼日報』2011 年 5 月 3 日)，劉楊「通遼市旅游発展現状及旅游線路設計」(『才智』2015－1) 5～7 頁

補註

1.図 1 は高橋作図による．
2.図 2 はリモートセンシング技術センター提供による．
3.図 3.4.5.6 は中尾作図による．
4.図 7.8 は高橋撮影（2012 年 8 月）による．
5.表 1.2 は高橋作成による．